

# 小学校英語における語彙・文法の定着を図るための フィンランド型プラクティスの開発とその実践報告

米 崎 里

## Developments and Practical Reports of Finnish-Type Practices for the Building of English Vocabulary and Grammar for Japanese Primary School Pupils

YONEZAKI Michi

**Abstract:** The present study focuses on English textbooks used in Finnish schools where English language education is very successful and aims to develop and adapt these Finnish-type practices for Japanese primary school pupils. This study also examines whether these Finnish-type vocabulary and grammar practices will be effective for Japanese primary school pupils. Based on the results of the analysis of Finnish textbooks, our developed practices include 1) various types of vocabulary and grammar practices including writing so that pupils can understand and acquire them, 2) practices explored for a wide range of learners, 3) vocabularies and grammar which are systematically linked, 4) chants (or songs) and grammar tables. Although it is shown that some of the practices, in particular the writing practices, were challenging and difficult for primary school pupils, most of the practices were regarded as enjoyable, useful and effective.

**Key Words:** Finnish-type practices, Finland, English teaching in primary school

**要旨：**本研究は学校教育において外国語教育が比較的 successful していると言われているフィンランドの小学校英語教科書を分析し、日本の小学校児童の実態に合わせたフィンランド型のプラクティスを開発することである。そして開発したプラクティスを研究協力校で実践し、プラクティスが児童の言語習熟度レベルに適切であるかを検証する。開発したプラクティスには、1) 多種多様な語彙・文法に関するプラクティス、2) 多種多様な学習者を考慮したプラクティス、3) 語彙と文法を組織的に結びつけたプラクティス、4) チャンツ・文法表が含まれている。小学校での実践の結果、「書くこと」のプラクティスにおいて課題が見られたものの、全体的にプラクティスに対する児童の肯定的な反応を得ることができた。

**キーワード：**フィンランド型プラクティス、フィンランド、小学校英語教育

### 1. はじめに

2020年度より、小学校中学年で音声に慣れ親しませながら、英語コミュニケーション能力の素地を養う外国語活動が開始され、高学年においては「読むこと」「書くこと」も含まれ系統立てて指導する教科としての外国語教育が導入された。小学校外国語は中学校で学ばれている内容を単に前倒しするのではなく、小学校の発達段階に応じた英語の運用能力を養う指導が強調されている。これまでの移行期間では文部科学省が作成した外国語教材

*We Can!* が小学校高学年で用いられてきたが、本年度より小学校高学年においては各出版社が発行している検定教科書が使用されている。各教科書は、学習指導要領の方針に沿っていずれも音声で十分に慣れ親しませ、コミュニケーションを行う目的や場面・状況に応じて、使うことを目的とした言語活動が中心に構成されており、同時に「読むこと」「書くこと」の活動も含まれている。

これまで小学校高学年の外国語活動で挙げられてきた授業課題として、たとえば濫井 (2018)<sup>1)</sup> はインプットが不十分でアウトプットを急ぎ発話しただけが多いこと、小学校での学びを覚えていることが少なく中学校へとながらぬこと等を挙げている。インプットが不十分でアウトプットを急がせることはこれまで小学校だけではなく、中学校や高等学校においても指摘がなされており (島田, 2018), その要因として、学習した語彙や表現 (中学校・高等学校では文法) の定着のための手立てが教科書の中で保障されていないことが挙げられる。学習した語彙や表現の定着のため教員自身が言語活動やプラクティスを考え補っていることが多いのが現状である。

筆者及び共同研究者らは、学校教育において外国語教育が比較的的成功していると言われているフィンランドに注目し、フィンランドの教科書では語彙や表現を定着させるためにどのような言語活動やプラクティスが用いられているのかを分析し、現在日本の小学校英語のニーズや児童の実態に合わせたフィンランド型の言語活動の教材開発を行っている。本研究では現段階で作成したフィンランド型の言語活動やプラクティスを示し、協力校の小学校で行った英語授業の実践の報告を行うことを目的とする。具体的な研究課題を以下 2 点とする。

研究課題①開発したフィンランド型のプラクティスが児童の言語習熟度のレベルに適切なものであるかの検証

研究課題②開発したフィンランド型のプラクティスに対する児童の評価の検証

なお本研究でいうプラクティスとは、機械的なドリルやリピートを要求するプラクティスだけを指すのではなく、DeKeyser (2007) が提示しているように、第 2 言語の知識や能力を発達させる目的で、学習者に体系的に意図的に行わせるあらゆる活動とし、いわゆる言語活動も含めたより幅広い意味で用いることとする。

## 2. 研究の背景

### 2.1 教育における言語教育計画を成功させる条件

昨今の小学校英語における政策的な変化として、世界の各国・地域で英語学習の開始年齢が引き下げられ、小学校レベルでの英語の必修化が進んでいる (Rixon, 2013)。この傾向に対して、Kaplan, Baldauf & Kamwangamalu (2011) は、早期の外国語教育を行っても母語に近い習熟度が得られる保証はないと論じており、外国語教育において失敗する 12 の理由を挙げている。Hayes (2014) は、Kaplan, Baldauf & Kamwangamalu (2011) が挙げた理由を逆に成功させるための前提条件として以下のように言い換えている。

- (1) 外国語学習に充てられている時間が十分に確保されている
- (2) 教員の研修は適切かつ効果的である
- (3) 習熟度と教員不足を埋めるためにネガティブスピーカー配置していない
- (4) 教材が十分、あるいは適切である
- (5) 求められる結果に対して授業方法論が適切である
- (6) 学習者のニーズに対してリソース量が十分である
- (7) コミットメントの継続性が確実である
- (8) 言語基準が問題であってはいけない
- (9) 国際的支援プログラムがあれば有効なものである
- (10) 小学校児童が早期言語学習に対して準備が整っている
- (11) 指導は地域または国の目的に合致している
- (12) 言語の危機的状況が進行する危険がない

### 2.2 なぜフィンランドか

フィンランドの外国語教育は、前述の Hayes (2014) が示した成功するための前提条件全てに当てはまるわけではないが、(4) の教材、とりわけ教科書が充実しており、学校教育における外国語教育の成功要因の一つとし

て報告されている（伊東，2014；米崎，2020；米崎・伊東，2010）。

フィンランドの小学校英語教科書は読本とワークブック2冊が併用で使用されており，読本は主に本文が掲載されており，ワークブックには本文に基づいた語彙や文法に関するプラクティスが掲載されている。プラクティスは，小学生の年齢に応じて様々な工夫が凝らしてあり，かつ多種多様であり，その量・質両方の充実が報告されている（米崎・川見，2019，2020 a，2020 b）。一方，日本の教科書は検定教科書制度があり，ページ数の制限があることが主な原因であると考えられるが，学習項目を様々な文脈で意識的に使用する経験を重ねる言語活動が少ないことが指摘されている（伊東，2014）。フィンランドの教科書に掲載されているプラクティス・言語活動の分析を試みることで，日本の教科書の課題がフィンランドの教科書ではどのように解消されているのかという示唆を得ることができよう。

またフィンランドの小学校では英語学習の当初から文法が教えられており，今後日本の小学校でも本格的に文法関連の指導法を検討することが必要であるならば<sup>2)</sup>，フィンランドの教科書では文法に関する言語活動やプラクティスが，小学校児童の年齢に応じてどのように展開されているのか分析することには意義があると言える。

### 2.3 フィンランドの教科書の特徴

米崎・川見（2019，2020 b）はフィンランドの小学校教科書の分析<sup>3)</sup>を量的，質的に行っている。量的分析結果として，①学習語彙数の多さ，②大量のプラクティスの提供，③言語形式を重視したプラクティスを挙げている。①の学習語彙数はフィンランド語から英語への語彙は2,847語，また英語からフィンランド語への語彙は2,908語となっており，日本の小学校と中学校で学習するとされる総語数（2,200-2,500語）より上回っている。また②に関しては，フィンランドの教科書には文法項目に関するプラクティス，語彙に関するプラクティス，発音に関するプラクティス，本文内容理解に関するプラクティス，チャンツや歌，文法表などが含まれている。表1は米崎・川見（2020 b）が示した日本とフィンランドの教科書<sup>4)</sup>の構成要素とその数と割合である。いずれのプラクティスも日本の教科書と比較すると圧倒的なプラクティスの数となっている。

③のプラクティスのタイプにおいては，米崎・川見（2020 b）は，フィンランドの教科書の文法プラクティスの種類と割合を分析しており，Littlewood（2004）のタスクタイプで示すと非コミュニケーション型プラクティスの割合が半分以上を占めていると報告している。非コミュニケーション型プラクティスとは，音や言語形式，言語形式とその意味の結びつきの定着を図るためのプラクティスであり，高島（2011）のタスクタイプではドリルやエクササイズと呼ばれている。フィンランドでは英語初期段階でまず言語形式を重視したプラクティスを与えることによって，学習者の文法理解の促進を目指している。

量的な分析だけを見ても，学習語彙数が多く，プラクティスの数も多く英語嫌いを増やすのではないかと考えてしまいがちであるが，フィンランドの教科書は日本のように暗記を求めてはいない。そもそも暗記すること自体不可能な量である。むしろ児童の年齢に応じて，楽しく学べる工夫がされており，かつ様々な場面や文脈に応じたプラクティスを提供し，使って学ぶことにより学習した内容が定着できる仕組みが取られている。その仕組みを以下質的分析結果として報告する。

質的分析結果として，米崎・川見（2019，2020 b）は，①多種多様なプラクティス，②学年内・学年間でスパイ

表1 教科書の構成要素

項目	フィンランド		日本	
	数	%	数	%
文法プラクティス	1,027	48.6%	401	47.4%
語彙プラクティス	561	26.6%	0	0%
発音プラクティス	101	4.8%	82	9.7%
本文内容理解に関するプラクティス	182	8.6%	191	22.6%
歌・チャンツ	105	5.0%	5	0.6%
ターゲットセンテンスの表示・文法表	113	5.3%	113	13.3%
その他	23	1.1%	54	6.4%
計	2,112	100%	846	100%

ラルに復習できるプラクティス, ③語彙と文法を組織的に結びつけたプラクティスの特徴を挙げている。①の多種多様なプラクティスに関しては, 言語形式に焦点をおいたプラクティスであるが, ゲーム感覚で児童が楽しみながら学べるプラクティスとなるよう工夫がなされている。また比較的取り組みやすい工夫がなされており, たとえば絵と単語を結びつけるだけのプラクティスや, 正しい英文を選ぶだけのプラクティス, また語彙に関するプラクティスはそのまます単語を書かせるのではなく, 一文字だけ書かせるプラクティスや, 文字の並べ替えをさせるだけのプラクティスなど, スローラーナーにも配慮がなされている。一方で, 英語が得意な学習者には, 比較的レベルの高いプラクティスが自由選択として提供されており, またユニットの最後に Extra と呼ばれるページがあり, そこではより高度なプラクティスが 1-2 ページに渡り提供されている。フィンランドの教科書は様々な学習者レベルに対応しており, 実に多種多様なプラクティスが提供されている。ゆえにプラクティスの量も多くなっている。その日の授業でどのプラクティスを教室で行うか決めるのが, 教師の腕の見せ所となる。

②の学年内・学年間でスパイラルに復習できるプラクティスに関しては, 学年をまたぎ繰り返して文法項目や重要な学習語彙を学習できる仕組みになっている。特に be 動詞と一般動詞の違いは徹底されており, 小学校 3 年生, 4 年生, 5 年生まで続く。各学年 3-4 ユニットの学習が終われば, **Reminder** と呼ばれる復習のページが掲載されており, これまで学習した語彙や文法の復習を行うことができる。

最後に, ③の語彙と文法を組織的に結びつけたプラクティスに関しては, フィンランドの教科書は語彙に関するプラクティスが豊富で, 学習した語彙は, 文法に関するプラクティスで必ず使われており, 語彙と文法が組織的に結びつけられている。語彙や文法に関するプラクティスは複数設定されており, 最後にこれまで学習した語彙や文法を統合したプラクティスにつなげている。

### 3. 開発したフィンランド型プラクティスの特徴

本章では, 共同研究者らと開発したフィンランド型のプラクティスの特徴を示す。

#### 3.1 検定教科書に沿った語彙・文法学習項目の配列

本研究はフィンランドの教科書の学習語彙・文法項目の配列を参考にしつつ, 日本の検定教科書に沿った学習語彙・文法項目の配列で作成を試みた。ただし, 検定教科書では扱っていないが, 学習が必要だと思われる表現や文法項目は追加している。現段階では小学校 5 年生分が完成しており, 5 年生は全 18 のユニット, そして 4 つの復習ユニット (Extra) を作成している。

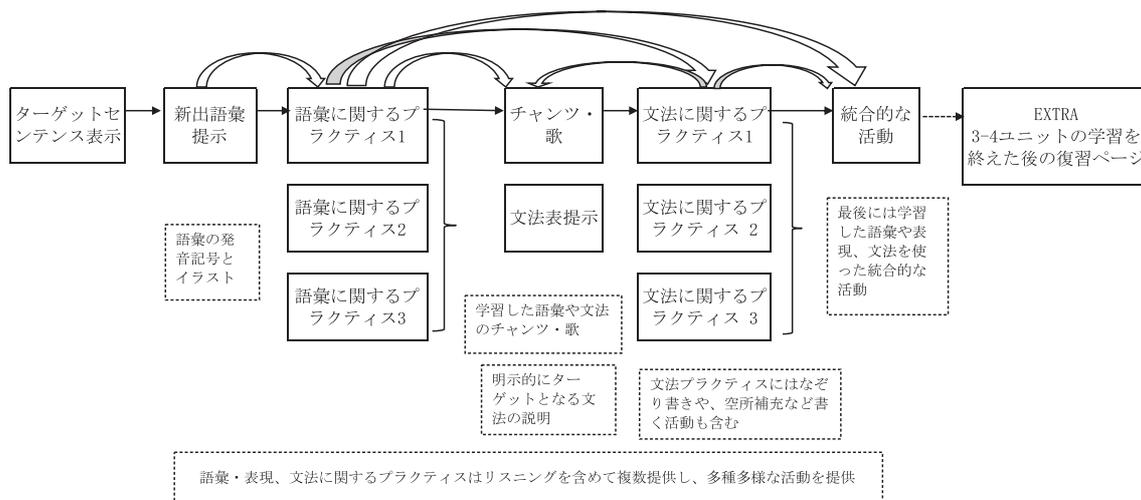


図 1 開発したプラクティスの展開 (1 ユニット分)

#### 3.2 語彙プラクティス→文法プラクティス→語彙と文法を統合したプラクティス

開発したプラクティスはまず語彙に関するプラクティスを行い, 引き続き文法に関するプラクティスを提供し

ている。文法プラクティスは学習した語彙と結びつけたプラクティスとなっている。たとえばユニット7の文法の項目は一般動詞 **have** を用いた疑問文、否定文であり、語彙はペットに関する語彙を学習する。ペットに関する語彙プラクティスの後、これらの語彙を用いて肯定文、否定文、疑問文のプラクティスを行う。語彙、文法プラクティスは、できるだけ多種多様なプラクティスの提供を試みており、最終的には学習した語彙と文法を使った統合的な言語活動型のプラクティスにつなげている。ユニットにより多少異なるが、各ユニットのプラクティスの展開を示すと図1のようになる。

### 3.3 チャンツ（歌）・明示的に説明された文法表の提供

児童の理解を促進するために、学習した語彙や文法を取り入れたチャンツ（または歌）や、明示的に説明された文法表を提供し、定着に役立てるようにしている。チャンツにはどこかに **punch line**（落ちや聞かせ所）を入れるようにしている。

### 3.4 使いながら学ぶ仕組み

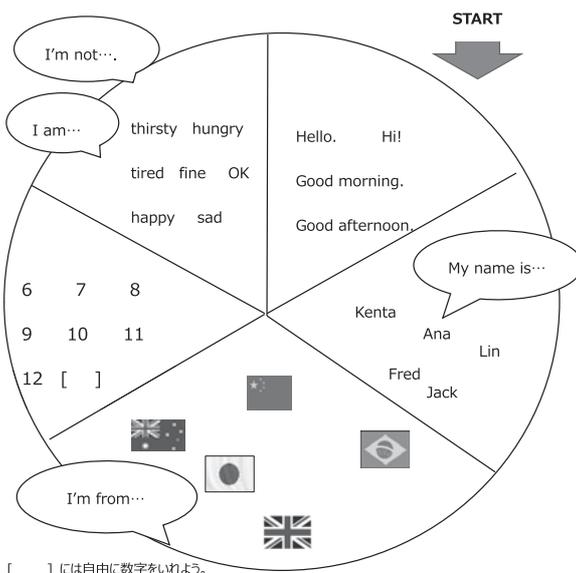
語彙や表現を暗記することが目標ではなく、プラクティスを通して使いながら学び定着につなげることを目指している。したがってプラクティスは多種多様で、様々な場面や文脈で使うことを意識したプラクティスを提供し、ペア活動の指示を多く含めている。

### 3.5 多様な学習者を考慮したプラクティス

開発したプラクティスはスローラーナーだけでなく、すでに英語をある程度学んでいる児童やアドバンストラナーの児童にも対応できるよう多様な学習者を考慮したプラクティスの提供を試みている。スローラーナーに対しては、イラストと英語を結びつけるだけの問題や、正しい方を選ぶだけの問題などを提供し、またゲーム感覚でできるようにプラクティスを工夫した。また絵やイラストを使うことで、英語の理解を促進するため絵やイラストをできるだけ多く用いた。

アドバンストラナーに対しては、早くプラクティスを終えれば、「ノートに書こう」などの指示を記してお

8 名前をえらんで、その人になりきって友だちに自分のことを言ってみよう。



[ ] には自由に数字をいれよう。

例) Hi! My name is Kenta. I'm from Japan. I'm eleven. I'm fine. I'm not sad. Nice to meet you!

📌 できた文をノートに書こう。



©フィンランド英語教育研究会

図2 プラクティス例

き、さらなるタスクができるようにしている。またフィンランドの教科書と同様、3-4 ユニットの学習を終えた後復習・応用のページを提供している。図 2 は Unit 1-4 までの復習・応用ページ (Extra 1) からの抜粋したプラクティスの例である。Unit 1-4 までは be 動詞 (am/are/is), 挨拶, 感情を表す形容詞, 数字, 国などが学習項目となっており, ここでは, 円盤の中の英語を自分で選び, それを組み合わせ, ある人物になりきって自分のことを言うプラクティスとなっている。

## 4. 実 践

### 4.1 目的

本実践の目的は, フィンランドの教科書の特徴に基づき, 筆者とその共同研究者らが日本の小学校用に開発したプラクティスを用いて, 日本の小学校で実践し, プラクティスが児童のレベルに適しているかを検証し, プラクティスに対する児童の評価を分析することである。そして実践で得た成果と課題をもとにプラクティスの改善につなげることを目的とする。

### 4.2 参加者と実践期間

本研究における参加者は明石市市立 A 小学校 5 年生 2 クラス 42 名の児童である。実践期間は 2020 年 1 月から 2 月まで計 4 回の授業を筆者が行った<sup>5)</sup>。

### 4.3 学習項目および指導の手順

学習語彙・文法のプラクティスは印刷をして児童に配布をした。本実践では, 表 2 に示すように, 文法項目に関しては一般動詞 (like, play, have) の肯定文, 否定文, 疑問文を, また学習語彙に関しては色, スポーツ, 動物を扱った。A 小学校では一般動詞はすでに *We Can!* で学習済みであったが, 学級担任によると, 各文法項目は定着までは至っておらず, また語彙に関しては, 既習語彙もあれば, 新出語彙もあるとのことであった。

表 2 学習項目一覧

	単元	語彙	文法項目
第 1 回	-	挨拶・自己紹介	
第 2 回	Unit5	色	I like - / I don't like - / Do you like -?
第 3 回	Unit6	スポーツ	I play - / I don't play - / Do you play -?
第 4 回	Unit7	動物	I have - . / I don't have - / Do you have?

#### (1) 語彙に関するプラクティス

授業では挨拶の後, はじめに新出語彙の提示を行い, 文字と音, 意味を確認した。新出語彙に関しては英語と日本語を示すだけでなく, 発音記号も記しているが, 今回は発音記号に関しては授業では扱わなかった。続けて新出語彙に関する活動を行なった。語彙に関する活動は図 1 に示すように複数提供している。例えば Unit5 の語彙に関する活動として聞こえてきた順番で数字を書く, 単語が記され 1 文字がかけておりそれを補う (図 3), 単語が続いており学んだ単語を丸で囲む活動が設定されている。さらに語彙を使うことを目的とした活動として,

3 次の単語の \_\_\_\_\_ にアルファベットを入れよう。

e i o u

1. r \_\_\_\_\_ d      2. bl \_\_\_\_\_      3. gr \_\_\_\_\_ n      4. wh \_\_\_\_\_ t \_\_\_\_\_  
     [赤]                      [青]                      [緑]                      [白]

マス目に好きな色を塗り、ペア・グループでビンゴゲームを提供している。

## (2) チャンツ（もしくは歌）・文法表提示

実践時には、チャンツの音声準備ができなかったため、筆者が児童とチャンツの音読を行い、このチャンツの英語の内容の面白味は何かの確認を行った。また文法に関するプラクティスを行う前に、文法表を使い学習する文法項目の説明を明示的に行った。説明は一方的に行うのではなく、児童とのやりとりを意識し、確認しながら行った。

## (3) 文法に関するプラクティス

語彙学習、チャンツ、文法表の確認を経て、文法に関するプラクティスを行った。文法プラクティスは、例えば Unit5 では疑問文に対して自分に当てはまる方に丸を囲むだけの問題から始まり、段階的に活動のレベルを上げていき最後には部分的ではあるがターゲットセンテンスを書くプラクティスにつなげた（資料1）。

3 ユニット分（第2回から第4回の授業）の学習が終われば、第5回目の授業で、統合的な活動及び Extra と呼ばれるページで復習を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、緊急事態宣言が発令され小学校が休校となったため、最後の統合的な活動を行うことはできなかった。

# 5. 結 果

## 5.1 分析手法

研究課題①の分析に関しては、児童に配布したプリントを毎回回収し、児童が正しく答えることができていたプラクティスと正しく答えることができなかったプラクティスを数え、その割合を算出した。正しく答えることができていたプラクティスとそうでなかったプラクティスの判断は、児童が各プラクティスで自己採点したものを参照にした。

また研究課題②に関しては4回分の授業終了後、児童に自由記述による質問用紙を配布し、樋口（2014）によって作成された KH コーダーによるテキスト分析で検証を行った。

## 5.2 分析結果

### (1) 課題研究①に関して

#### 1) 語彙に関するプラクティス

語彙に関するプラクティスの児童の正解率はかなり高く、96.4%であった。その理由として、暗記を求めるのではなく、音声を聞いたりイラストを見て単語の意味を問う問題など比較的取り組みやすいプラクティスであったこと、既習語彙も含まれていたことなどが考えられる。

#### 2) 文法に関するプラクティス

文法に関するプラクティスにおいては、図1に示す文法に関するプラクティス1・2と文法に関するプラクティス3の2種類に分けて別々に算出した。文法に関するプラクティス1・2のタイプは意味とその使い方を理解することを目的とした問題で、選択問題、インタビュー活動、リスニングなどが含まれる。一方、プラクティス3のタイプはターゲットセンテンスの一部を書く、または日本語から英語に部分的に翻訳するなど「書くこと」を目的としたプラクティスとなっている。

プラクティス1・2タイプの正解率は91.9%と高かった。その理由として、プラクティスは負荷のかからないものから始め、少しずつ負荷をかけたプラクティスに移行し、児童は無理なくプラクティスに取り組めることができたと考えられる。また文法プラクティスを行う前に語彙に関するプラクティスを行なったこともうまく文法プラクティスにつながった理由の一つであると考えられる。

一方、プラクティス3のタイプの正解率は56.4%と低く、特にスローラーナーの児童の正解率は36.6%であった。児童は日常書く活動に慣れていないということが大きな理由であると考えられるが、今回のようにターゲットセンテンス全文ではなく、部分的に訳し、かつ事前のプラクティスで練習を行ったにももかかわらず、書く活

動は児童にとってこちらの予想以上に難しいことが判明した。また、英語を言えるが音と綴りが一致しないと言う児童が多く見られた。

## (2) 研究課題②に関して

開発したフィンランド型の言語活動やプラクティスに対する児童の評価を検証するために、授業に対するコメントを自由に書いてもらい、その自由記述回答の文(総計 60 文)を KH コーダーにかけテキスト分析を行った。

### 1) 頻度が高い単語に関して

児童の自由記述の中で頻出頻度が高かった単語を表 3 に示す。頻度数が最も高い単語は「英語」(34 回)であり、続いて「楽しい」(21 回)であった。また「授業」(12 回)、「思う」(10 回)、「書く」(10 回)、「勉強」(8 回)、「難しい」(7 回)といった単語もよく使われていた。それ以外に「言う」「先生」がそれぞれ 5 回、「覚える」「練習」がそれぞれ 4 回となっていた。

### 2) 共起ネットワーク図

頻出頻度の高かった単語がどのような単語と結びついているかを分析するために共起ネットワークを用いて分析を試みた。共起ネットワークは、出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語が線で結ばれ、それがクラスター(ネットワーク)として示される。図 4 がフィンランド型のプラクティスに対する児童たちのコメント(自由記述)の共起ネットワーク図である。

図 4 から読み取れることは主に 3 点である。以下本文中の (A) (B) (C) は図の (A) (B) (C) に対応している。

表 3 頻出頻度が高い単語一覧

	単語	頻度数
1	英語	34
2	楽しい	21
3	授業	12
4	思う	10
4	書く	10
6	勉強	8
7	難しい	7
8	言う	5
8	先生	5
10	覚える	4
10	練習	4
12	ありがとう	3
12	たくさん	3
12	教える	3
12	言える	3
12	少し	3
12	知れる	3
12	発音	3
12	SE	3

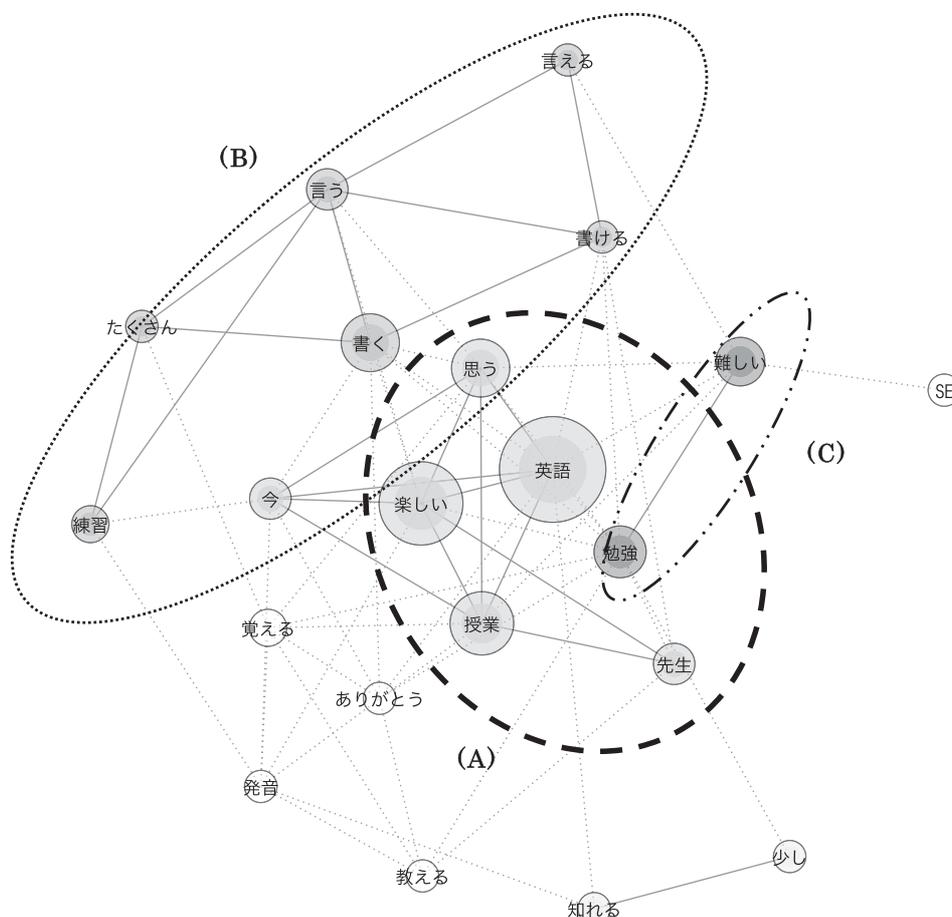


図 4 共起ネットワーク図

## (A) 楽しい学び

図4の中の(A)には「英語」「楽しい」「授業」「先生」「思う」「今」といった単語のまとまりから、今回のプラクティスにおいて児童が楽しく学べたことが読み取れる。具体的な児童のコメントを抜粋する。

- ・授業をして今までにやってきた英語でも細かい発音を練習できて楽しかったです。
- ・私は今まで米崎先生の授業をして友達と発表したりして楽しかったです。
- ・いろんなゲームとか聞いたり書いたりした英語いっぱい楽しかったです。
- ・英語の発音とかが良くなったり、わからない英語をいっぱいしれて楽しかった。

通常、ゲーム的要素が入ったプラクティスに対しては肯定的な反応を示していることはこれまで小学校英語の実践研究において数多く報告されている。本研究では語彙と文法を定着させることを目的とし、いわゆる言語形式を重視したプラクティスを含んでいる。言語形式を重視したプラクティスに対しても児童が「楽しい」とコメントをしていることから、プラクティスを工夫すれば今後小学校英語で初期段階から明示的な文法指導も十分可能であることが期待できる。

## (B) 様々なプラクティスに対する児童の肯定的な反応

(B)には「言う(言える)」、「書く(書ける)」、「練習」、「たくさん」と言う単語のまとまりが見られ、「話す」だけでなく「書く」活動に対しても児童の肯定的な反応が示されていることが分かる。実際の児童のコメントを抜粋する。

- ・言う練習にもなったし書く練習にもなって楽しかったです。
- ・言えなかった英語や書けなかった英語がほとんど言えるようになったり、英語を言ったり書いたりするのが楽しくなった。
- ・私は英語の授業をして、たくさんいろんな言い方を覚えることができました。書くこともたくさん分かったのでやってよかったと思います。

「書く」プラクティスの正解率は低かったが、児童は英語で「言える」だけでなく「書く」ことも含めて、様々なプラクティスを楽しみ、英語の学びを実感していることが読み取れる。

## (C) チャレンジングなプラクティス

肯定的な反応が多かったものの一方で、(C)で示されている「難しい」「勉強」という単語のまとまりも見られた。しかしながら、児童の反応は難しかったけれども勉強になったということが読み取れる内容であった。実際のコメントを以下に示す。

- ・少し難しかったけどしっかり勉強できてよかったです。
- ・英語を書くのと言うのは難しかったけど頑張ったらいけた。
- ・私は英語が苦手なだけで、あまり好きではないけど米崎先生に教えてもらって英語が楽しかったです。
- ・SE(英語の授業名)の授業はとて楽しかったです。難しいところでも簡単にできたと、間違えずに楽しくできました。

児童のコメントより、できるプラクティスばかりだけでなく、多少児童にとってチャレンジングなプラクティスも必要で、むしろ児童はチャレンジングなプラクティスを達成することで、英語の学びをより実感できるのではないだろうか。

## 6. 考察とまとめ

本研究では、日本の教科書には学習した語彙や表現、文法の定着のための手立てが教科書の中で保障されていないという課題をもとに、フィンランド型のプラクティスを開発し、その開発したプラクティスが小学校児童の学習レベルに適しているか、そしてプラクティスに対する児童の評価を検証することを目的とした。授業実践の結果、児童は開発したプラクティスほとんどを取り組むことができおり、開発したプラクティスに対して肯定的な評価を示している。しかしながら「書くこと」のプラクティスに対しては、難しさを感じ、また他の種類の

プラクティスと比べ正解率も低い結果となった。実際授業を行なってみると、児童が書くことには予想以上に時間がかかったことも課題である。

この結果を受けて共同研究者と協議を重ね、以下のようなプラクティスの改善を図った。

### (1) 問題指示文の変更

修正前は、たとえば「\_\_\_\_\_に英語を入れよう」という指示文であったが、このような指示であれば児童は英語を書いてしまう。英語を書くとき時間がかってしまい、また早く作業を終える児童とそうでない児童の差が出てしまう。そこで「\_\_\_\_\_に英語を入れて言ってみよう」という指示文に変更した。英語を言えるようになることを優先し、同時に児童の学習能力に応じて書く活動も選択できるようにした。

### (2) 解答の番号化

英語の並べ替え問題は、本プラクティスに多く提供しているが、この並べ替え問題はたとえ短い英文であっても、英語を書かせると時間がかかった。そこで以下のように正しい順番に並べ替えるために番号のみを記すよう変更した。なお、早く解答ができた児童には選択として「📝ノートに書こう」という指示を与えた。

修正前：

例にならって正しい順番になるよう並べかえよう。

例) your - name - What's - ? → What's your name?

1. not - You're - OK - . →

2. twelve - Are - you - ? →

(省略)

修正後：

例にならって正しい順番になるよう ( ) に番号をいれよう。

例) your - name - What's - ? → your - name - What's - ?

( ) ( ) ( ) ( 2 ) ( 3 ) ( 1 )

1. not - You're - OK - .

( ) ( ) ( )

2. twelve - Are - you - ?

( ) ( ) ( )

(省略)

📝ノートに書こう。

### (3) ヒントの提示

児童が単語の綴りを覚えるには時間を要し、たとえ日本語から英語に部分的に訳すプラクティスであっても児童にとっては負荷がかかる。そこで、部分翻訳のプラクティスでは、横（もしくは下）に入れるべき英語の吹き出しを与えたり、またいきなり英語を書かせるのではなく、なぞり書きのプラクティスを行ってから翻訳のプラクティスを行うよう修正した。

修正前：

**12** 例にならって、\_\_\_\_\_に英語をいれよう。

例) Are you hungry ?                      あなたはおなかがすいていますか。

1. \_\_\_\_\_ you angry?                      あなたはおこっていますか。

2. Are \_\_\_\_\_ from America?                      あなたはアメリカの出身ですか。

3. \_\_\_\_\_ \_\_\_\_\_ ten?                      あなたは10才ですか。

 ノートに書こう。

修正後

**12** 例にならって、\_\_\_\_\_に英語をいれて言ってみよう。

例) Are you hungry ?                      あなたはおなかがすいていますか。

1. \_\_\_\_\_ you angry?                      あなたはおこっていますか。

2. Are \_\_\_\_\_ from America?                      あなたはアメリカの出身ですか。

3. \_\_\_\_\_ \_\_\_\_\_ ten?                      あなたは10才ですか。

 ノートに書こう。

最後に今後の課題について言及する。本研究では開発したフィンランド型のプラクティスが児童の言語習熟度レベルに適切であるかを検証したのみで、学習した語彙や文法が定着したかどうかの検証を行っていない。今後学習した語彙や文法が実際定着したかどうかの検証を行う必要がある。また今回の実践において、語彙・文法項目の学習が一部既習であったため、児童はプラクティスをスムーズに取り組めたのかもしれない。今後は全くの新出語彙・文法事項の実践が必要である。さらに、今回は4回だけの授業実践であったが、今後長期的かつ多様な学校での実践が必要である。

本研究の開発したフィンランド型のプラクティスが日本の小学校英語の発展の一助となれば幸いであり、今後プラクティスの研究開発をさらに深めていきたい。

注

- 1) 澁井(2018)は2010年代に入って導入された小学校高学年の外国語活動の課題として、本文で示した課題以外に、1) 会話の状況設定とやり取りが不自然で、目的が不明瞭である、2) 児童が自分の考えを持ち、しっかりと伝える機会が少ない、3) 文字指導(書く・読む)の方法がよくわからないことを挙げている。
- 2) 小学校学習指導要領の中で文法に関連する内容として、目標に「外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解する」、「音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりする」が挙げられている。また、文や文構造の指導に当たっての留意点として、「児童が日本語と英語との語順等の違いや、関連のある文や文構造のまとまりを認識できるようにするために、効果的な指導ができるよう工夫すること」、「文法の用語や用法の指導に偏ることがないよう配慮して、言語活動と効果的に関連付けて指導すること」と明記されている。
- 3) 分析した小学校教科書はSanoma Pro社のYippeel! 3, 4, 5, 6(小学校3年生から6年生用)の4冊である。
- 4) 米崎・川見(2019, 2020)の研究では、フィンランドの小学校教科書の比較対象として、日本の中学校の教科書を分析している。その理由は、フィンランドの小学校では英語学習開始時から文法指導を行っており、本格的に文法を教える日

本の中学校の教科書を分析対象とすることが適切であるとしている。

- 5) 当初は計5回の授業実践を予定したが、新型コロナウイルス感染症拡大の緊急事態制限が出されたため4回の実践となった。

#### 謝辞

本研究にご協力をくださった小学校の児童の皆さまと先生方に心より感謝申し上げたい。

本研究は JSPS 科研費（基礎研究（C）, 課題研究番号 19K 00780）の助成金を受けたものである。

#### 引用文献

- DeKeyser, M. R. (2007) *Practice in a second language*. Cambridge University Press.
- Hayes, D. (2014) *Factors influencing success in teaching English in state primary schools*. London: British Council. [https://www.teachingenglish.org.uk/sites/teacheng/files/pub\\_E324\\_Factors\\_influencing\\_success\\_in\\_teaching\\_English\\_in\\_state\\_primary\\_schools\\_FINAL%20v3\\_WEB.pdf](https://www.teachingenglish.org.uk/sites/teacheng/files/pub_E324_Factors_influencing_success_in_teaching_English_in_state_primary_schools_FINAL%20v3_WEB.pdf)
- 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための軽量テキスト分析』東京：ナカニシヤ出版。
- 伊東治己 (2014) 『フィンランドの小学校英語教育』東京：研究社。
- Kaplan, R., Baldauf, R., & Kamwangamalu, K. (2011). Why educational language plans sometimes fail. *Current Issues in Language Planning, 12* (2), 105-124.
- Littlewood, W. (2004) The task-based approach: some questions and suggestions. *ELT Journal, 58* (4), 319-326.
- Rixon, S. (2013) *British council survey of policy and practice in primary English language teaching worldwide*. London: British Council. [https://www.teachingenglish.org.uk/sites/teacheng/files/D120%20Survey%20of%20Teachers%20to%20Ys\\_FINAL\\_Med\\_res\\_online.pdf](https://www.teachingenglish.org.uk/sites/teacheng/files/D120%20Survey%20of%20Teachers%20to%20Ys_FINAL_Med_res_online.pdf)
- 澁井とし子 (2018) 「小学校英語教科化の前に授業目標を考える」 *Mathesis Universalis 19* (2), 235-253.
- 島田勝正 (2014) 「インプット重視の文法指導」『英米評論』第28号, 37-52.
- 高島英幸 (2011) 『英語文法導入のための「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ』東京：大修館書店。
- 米崎里 (2020) 『フィンランド人はなぜ学校教育だけで英語を話せるのか』東京：亜紀書房
- 米崎里・伊東治己 (2010). 「フィンランドの小学校の英語教科書分析－Autonomy の視点から－」『小学校英語教育学会紀要』第10号, 37-42.
- 米崎里・川見和子 (2019) 「フィンランドの小学校英語教科書における語彙活動の分析」『中部地区英語教育学会紀要』第48号, 229-234.
- 米崎里・川見和子 (2020 a) 「フィンランドの英語教科書における本文内容理解を促進するためのプラクティス分析」『中部地区英語教育学会紀要』第49号, 349-354.
- 米崎里・川見和子 (2020 b) 「フィンランドの小学校英語教科書におけるプラクティスの分析」『日本教科教育学会』第43巻第2号, 35-48.

資料1 開発したプラクティスの例（一部抜粋）

6 つぎの質問に対する自分の答えを○でかこもう。ペアで練習しよう。

- 1. Do you like red? - Yes, I do. / No, I don't.
- 2. Do you like green? - Yes, I do. / No, I don't.
- 3. Do you like white? - Yes, I do. / No, I don't.
- 4. Do you like black? - Yes, I do. / No, I don't.
- 5. Do you like blue? - Yes, I do. / No, I don't.
- 6. Do you like yellow? - Yes, I do. / No, I don't.

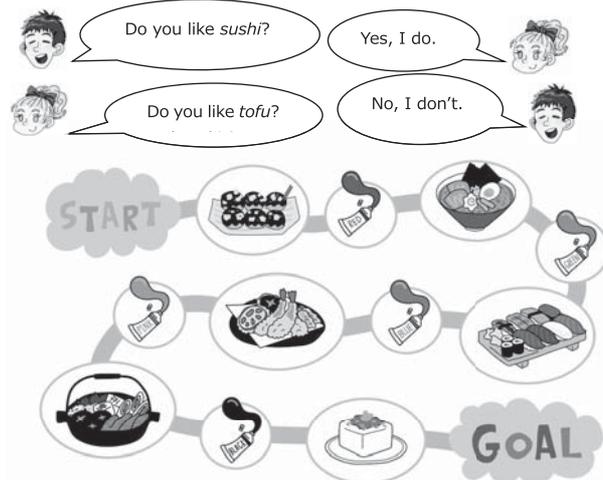
📝ノートに書こう。

7 イラストにあうように Yes, I do. か No, I don't. で答えよう。

- 1. Do you like *takoyaki*?  \_\_\_\_\_, I \_\_\_\_\_.
- 2. Do you like *tempura*?  \_\_\_\_\_, I \_\_\_\_\_.
- 3. Do you like *sushi*?  \_\_\_\_\_, I \_\_\_\_\_.
- 4. Do you like *sukiyaki*?  \_\_\_\_\_, I \_\_\_\_\_.
- 5. Do you like *tofu*?  \_\_\_\_\_, I \_\_\_\_\_.
- 6. Do you like *ramen*?  \_\_\_\_\_, I \_\_\_\_\_.

📝ノートに書こう。

9 ペアでサイコロゲームをしてみよう。サイコロの目の数だけ進んだら、その食べ物や色が好きかどうか相手に聞いてみよう。先に GOAL に着いた人が勝ちです。



10 日本語にあうように、\_\_\_\_\_ に英語をいれて言ってみよう。

- 1. \_\_\_\_\_ blue. わたしは青色が好きです。
- 2. \_\_\_\_\_ blue. わたしは青色が好きではありません。
- 3. \_\_\_\_\_ green? あなたは緑色が好きですか。
- 4. \_\_\_\_\_, \_\_\_\_\_ . はい、好きです。
- 5. \_\_\_\_\_, \_\_\_\_\_ . いいえ、好きではありません。